

(コロサイ二・五〜七)

「三択の女王」と言えば伝説の長寿番組、「クイズダービー」の四柱、竹下景子さんだが、三択とはもともと「三者択一」の略語。それが独り歩きしてだろうか、いつのころからか「一択」なる表現が用いられるようになった。ウェブ上の日本語表現辞典によれば俗に「他を選ぶ余地がない」「迷わずこれを選ぶ」といった意味で用いられる表現と定義されていた。例文を挙げれば「山にするか海にするか、だとはなから山に決まりなんだから、まっ山一択ってことで」といった感じだ。ちなみに一説によればこの一択、テレビなどの業界用語から広まったとか。まったく言葉は生き物としかいいようがない。

閑話休題。使徒パウロは自他ともに認めるキリスト一択の男であったが、信徒にも同じように徹底してキリストに生きることを要求している。以下三つのことを取り上げたい。

一、キリストご自身に根差す

キリストにあつて歩む、換言すれば生

活し、成長していくためには何よりもキリストに根差さねばならない。ここ2週間、あちこちの無人販売所に淡竹(はちく)が売られているのだが、「雨後の筍」なる言葉もある通りでタケノコの成長は早い。「竹と言えば上田、上田と言えば竹」とまで言われる上田弘一郎博士の研究では一日に約一・二米ほど成長するというが、その成長を支えているのは地下に張り巡らされた地下茎である。もちろんかの国には竹はなかったろうが、真の成長のためにはまずキリストに根差すことが必要であることをパウロは植物の暗喩を用いて説いたのである。「建てられる」も同じ。それはこのことばが原語では「上に」と「建てる」の合成語であることからわかる。「コリント三章においてパウロは信仰者の土台はキリストだと言い、キリスト以外のものを据えることはできないと断言している。キリスト者の土台はまさにキリスト一択なのである。

二、キリスト信仰を確固なものにする

言いたいことはキリスト一択、ただそれだけというのがここにおけるパウロのロジックだが、その主張を有効に伝達するためには多様な比喻を用いる。植物、建築に続く第三の比喻は商業用語である。「堅くする」は原語では交易の時に法的な保

証を与えることを指す。そして私たちキリスト者の人生を保証するものといえは信仰である。それは真実なるキリストに私たち信仰者が心からの信頼を寄せるという関係であり、さらに言えばそのキリスト理解は「教えられたとおりのもの」、即ち使徒伝来の正統的な福音(参「コリント一五・三〜五」)でなければならぬということである。この手紙が書かれたころ、教会にはすでにキリストに依らない新奇な教えや哲学が流入しており、それに影響された人々が一定数いたようである。そうした状況下においてパウロはキリスト者の人生を裏書きして下さるお方はキリスト以外にはないと断言するのである。

三、キリストに感謝する

このようにキリスト信者の生活はキリストに始まり、キリストに保証されるものである。そうであれば私たちがささげる感謝は何をおいてもキリスト、ひいてはキリストを遣わした父なる神に向かうべきであることは当然の帰結である。考えてみよう。キリストという土台がなかったら、私たちの人生は文字通り「空中楼阁」、あるいは根無し草のごとく頼りないものになってしまうのではないか。またキリストが私たちの人生の意味と価値を保証してくださらなかったとしたら、私たちはこの格

付けしあい、喰うか食われるかを繰り返す社会の中で今なお乱高下の人生を生きることになっていたらう。平凡に見える私たちの今日の幸せは実にキリストにある。そう考えるなら私たちの心にはキリストに対する感謝が自然にあふれてくる。この感謝と喜びこそ真実な礼拝の基礎であり、またこの喜びと感謝がさらなる信仰成長の動力になる。そう、キリストに対する感謝と喜びは信仰と不可分なのだ。

* * *

「ライク・ア・プレイヤー(マドンナ)」「マン・イン・ザ・ミラー(マイケル・ジャクソン)」などのクワイヤーアレンジを担当したのはグラミー賞七回受賞のゴスペル界の巨匠、アンドレ・クラウチだが、数ある彼の楽曲の中で一つを選べと言え、やはり「ジーザス・イズ・ジ・アンサー」とどめを刺す。B Answerではない、B Answerであることに注意を払うべきだ。イエスは一つの答えではない。唯一の、今様に言えば「一択」の答えだ。コロサイの教会が脅かされていたように、イエスを選択可能な答えの一つに引き下げようとする誘惑は今も続いている。しかしキリストを受け入れた私たちは誘惑を決然と拒否しよう言うべきである。「我々はどこまでもキリスト一択である」と。